

『隋書』文學傳の人びと

——隋代の南朝由來の文人たちをめぐって——

原 田 直 枝

南山大學

文學史研究において、誰もが知っているような顯著な存在、個性的な輝きを放つ特定の人物・作品について検討するのは、もちろん重要な務めの一つであるが、もう一つ、後世の者にとってはなかなか關心の對象になりにくく、無名に等しいような人々であっても、當時においては注目を浴びたり、話題を呼んだりした、というような存在に光を當ててみる、というアプローチの仕方もあるのではなからうか^①。特にそれは、或る一定の時期の文學の動向を把握しようとする場合、必要であり、また有効な方法なのではなからうか。本稿は、この豫測にもとづいて、隋代における南朝出身者たちによる文學の情況を検證し、南北分裂の統

『隋書』文學傳の人びと（原田）

一によって一つの舞臺で動き始めた南北文風交流の新段階^②について一考を試みるものである。

一 南北朝・隋・唐

良きにつけ悪しきにつけ、隋という時代の特徴は、久々の統一王朝ということに關わつていと言つてよいだろう。歴史的に、魏晉南北朝という長期にわたる分裂の時代と、世界に名を知られる大帝國を誇つた唐との轉換點に位置する、そのわずか三十八年間の王朝の情況を一言で表すのは結構難しい。そんな中で、宮崎市定『隋の煬帝』の一條は、おおまかなようで、實はわかりやすい評であると思う。

——隋は文帝の時代、南北を統一した必然の結果でもあるが、種々の新しい政策を實施している。そしてそれは後の唐に引きつがれたことは確かである。しかし新しい制度は始まったが、人物のほうはまだ舊態依然たるものがあつた。

ここに言う「新しい政策」「新しい制度」を牽引するのは、隋朝の母體を成すところの北朝出自の人々であつたことは周知の通り。一方また、「舊態依然」であつたのは、北朝出身者も南朝出身者ともにそうであつたであろう。何しろ、時代のリーダーであつた第二代皇帝煬帝でさえ（煬帝は）南北朝時代の混亂した歴史に結末をつけた古い型の天子であつた」（前掲書、傍點は論者）と評されているのだから。

これを文學に當てはめて考えてみよう。「舊い（古い）」時代を引きずつた人々が作り出した文學には、やはり新しくなりきれずに「舊（古）」なる要素が色濃く反映していたのであろうか。人間の變化は、じつくりと時間をかけて自分自身も忘れた頃に氣づくことが多い。後世から見て「歴史の轉換點はここだつた」と區切られる瞬間が、すなわちその時を生きる人びとにとって何らかの自覺を伴うような「區切り目」であるというような劇的なことは、稀有だろう。そして、個々が自覺しないようなところで起こり始めた「時代の變化」の大きなうねりに、人それぞれがそ

れぞれの形で巻き込まれ、やがて對應してゆく過程が、さまざまな形でもつて表出される。文學も、そういった過程から生れる產物の一つに數え得る。

徐々に「新しい」方向に動きだし、「南北統一」の形に向かい始めたように見える政策や制度など政治の枠組みが、實はそう易々と改まらなかつた隋代、文學の場面においても、混沌とした情況は解消されずにいた。現在、隋代の文學をもつて、「隋唐文學」と、次に來る唐代の文學潮流の出發點として關係づける場合もあれば、本稿がそうであるように、「魏晉南北朝文學」の最終到着點として前の時代に關係づける場合もあり、どちらにも定まりそうに無いのは、この時期、南朝由來のものと、北朝由來のものが、雜然として溶け合はぬまま、お互い格別な變化を遂げぬまま共存していたことと無縁ではないだろう。この時期、南朝系の人々も北朝系の人々も時代の新たな息吹にさらされ、變化を體驗したのは同様だが、それぞれが受け繼ぐ背景によつて、新しい時代の下での在り方にも相違が出てくるのは、當然と言ってよい。兩者のうち、本論では、政治的に

言わば「組み込まれてゆく」側に立った南朝由來の人びとに焦點を當て、彼らが新たな時代情況にどう對應し、その中で自らが受け繼いだ文學傳統をどう發揮したのかを探るのであるが、このような關心を持つて隋代文學を見渡そうとするときに、『隋書』文學傳は非常に興味深い材料となる。次に、『隋書』並びにその「文學傳」成立の背景を一度り確認しつつ、その理由を明確にしてみよう。

二 『隋書』文學傳

周知の通り、正史は、當該の時代を繼承した勝朝が責任編纂するもので、當然、その直前の時代の雰囲気を取りアルに傳えるという額面通りの役割を果たすばかりではなく、新王朝の方針、志向するところを天下に知らしめるという役割をも果たす。正史の中に立てられる「文學傳」や「文苑傳」も例外ではない。『隋書』が編纂された七世紀前半、唐初は、唐王朝によってこれに先立つ晉南北朝各王朝の正史編纂が組織的に進められた時期であり、編纂された各書からは、前代の各王朝に對する唐王朝側の評價、新王朝と

『隋書』文學傳の人びと（原田）

の關連づけ等の意識を窺うことが可能である。それにしても、特に『隋書』などは、編纂時點を遡ることわずか二、三十年前に終わった時代についての記述であるから、もとづいた情報の新しさ、時間の経過に伴う變改の少なさにおいて、隋代に關する他の史料とは比較にならない強みがある。その「文學傳」には、隋代文學に關する、どのような情報が反映されているのだろうか。

さて、北朝文學に限らず、南朝の文學についても、各代ごとその特長を整理されている各「文學傳」「文苑傳」は、編纂者たちの文學に關する「見識」また、編纂當時の文學觀・文學史觀を知る便となるが、とりわけ、そうした「見識」を明白に見て取ることができるのは、傳の冒頭に掲げられた「序」や傳末に附された「論」においてである。ここに、唐以前に成立したものも含めて、魏晉南北朝に關する正史（「文學傳」「文苑傳」一覽の便により、『後漢書』も含めてある）の編纂擔當者、成立時期と、それぞれにおける「文學傳」もしくは「文苑傳」の有無、その「序」「論」

『後漢書』	宋・范曄	五世紀	『文苑傳』贊
『晉書』*	唐・房玄齡等	貞觀二十一年(六四六)六四八)	『文苑傳』序、論
『宋書』	梁・沈約	齊梁交替期(五〇〇年前後)	無
『南齊書』	梁・蕭子顯	六世紀初頭	『文學傳』論
『梁書』*	唐・姚思廉等	貞觀十年(六三六)	『文學傳』序、論
		隋開皇九年(五八九)姚察受命編撰梁陳二朝史。	
『陳書』*	唐・姚思廉等	右に同じ	『文學傳』序、論
『魏書』*	北齊・魏收等	天保五年(五五四)	『文學傳』序、論
『北齊書』*	唐・李百藥等	天保二年(五五一)高洋命魏收編撰。	『文學傳』序、論
『周書』*	唐・令狐德棻等	貞觀十年(六三六)	無
『隋書』*	唐・魏徵等	貞觀十年(六三六)	『文學傳』序、論
『南史』	唐・李延壽	顯慶四年(六五九)	『文學傳』序、論
『北史』	唐・李延壽	刪節宋南齊梁陳魏北齊周隋八書。 右に同じ	『文苑傳』序、論

書名下の*印は奉敕撰であることを示す。

の有無を整理してみると、上掲の表のようになる。

表にしてみるとわかる通り、成立の時期が早い『後漢書』や『南齊書』では「序」は冠せられておらず、『隋書』と同じく唐初に成立した、後發史書の「文學傳」「文苑傳」に至って慣例化したようである。^⑤その推移の意味するところはともかく、『隋書』文學傳編纂の方針、立傳人物を選んだ基準を知るためには、やはり「序」に據るのが最適だろう。

「序」では、隋に至るまでの古代からの文學の流變が整理され、そこでは、南朝末期の文風に對する批判的な論評と、北朝側文學の成長とそれを支える氣風への肯定的な評價とが示されており、唐初における文學に關する認識を

解明するための有力な資料として着目されている。^⑥

ここで、「序」の概略を辿ると、まず、南北朝のうちでも、梁の盛期までについては、南の江淹、沈約、任昉と、北の溫子昇、邢子才、魏伯起を並稱して、南朝・北朝それぞれの文學を互いに拮抗する關係であつたかのように論ずる條は、今やだいたい有名なのではないか。そして、梁の衰退とともに簡文帝、湘東王、徐陵、庾信たちによる南の文學の風を「淺」「繁」「匿」「彩」「輕險」「情多哀思」なる「亡國の音」と非難し、それが北周の江南攻略によつて、北地まで席捲するようになった、と指彈したうえで、それを一掃したのが隋高祖である、とする。南朝由來のものと北朝由來のものと。性質も浸透度も異なる兩者の間に、どのような折り合いをつけ、今後の方向としていくか。過去の流れを整理し、隋代を意義づけようとする議論が展開されている。

こうして「序」に示された思想に對して、實際にその傳に採録されている文人たちの作品、人生はどのように對應するのだろうか。採録された文人の活動は、「序」の趣旨

を果たして證し得るものなのか。

夫名刊史冊、自古攸難、事列春秋、哲人所重。筆削之士、其愼之哉。

——そもそも、名前を史書にのこすことは昔から難しいことであり、事跡を史書に記述されることは知者の重んじるところである。歴史家はこのことを心しなければならぬ。

（『史通』人物篇）

このように歴史家が旨とする通り、古代中國の士大夫にとつて、正史に名を残すことは、とても重要な事柄であつた。もし、その名を残す場が雜傳の中であるなら、それがどういう意味を持つのかは、その「序」や「論」に示された理念によつて大きく左右されるだろう。ところで、歴代の「文學傳」「文苑傳」の「序」「論」の内容と、その傳に收録されている文人との對應關係について、これまでどれだけ注意が拂われてきただろうか。

文學史を見渡せば、正史「文學傳」「文苑傳」に收録さ

れなくとも、その「序」に名を擧げられる文人は多く、後世、その時代の文學情況を代表する存在として扱われる例には、事缺かない。「序」はその時代の文學全般を蓋う存在だが、「文學傳」を構成する文人が關わるのは、その一部に過ぎない。その結果かどうか、「文學傳」「文苑傳」本體に收録されている人々には、後世の文學批評の網の目から、ともすればこぼれ落ちてしまふような、あえて言えば文學史的に地味な例が、少なくないように見える。「文學」「文苑」の名を冠される者と、あえて「文學」の限定をされない者と、どこでどう分かれるのか。その分岐點を、文人たちの事跡と作品の檢證から探ってみることは、「文學」の意味を窺うことに繋がるだろう。

例えば、本論で扱う『隋書』文學傳の場合、「序」に、この傳に收録される人物について「或學優而不切、或才高而無貴仕、其位可得而卑、其名不可湮沒」との記述が見える。すなわち、編者から「隋代の文學情況を最も代表するめざましい存在」と認められたからではなく、「まあ、これも残しておいたほうがよい」という程度の判斷の下に

「歴史に名を残す」ことになった人々。案の定、彼らの存在は、その後も文學史の輝く項目にはなり得ていないものが多い。しかし、今日から振り返って、時代の情況を窺い知るための貴重な手がかりとなし得る可能性は、見過ごしにできない。彼らの作品と處世から窺い知る隋代の文學の情況は、どのようなものであろうか。

三 『隋書』文學傳所收の人々

『隋書』文學傳に、收録されているのは、次の十七人（採録順）である。

*劉臻 王頰 崔儵 *諸葛穎 孫萬壽 王貞 *虞綽 *王胄 *庾自直 *潘徽 杜正玄 〃 常得

志 尹式 劉善經 祖君彥 孔德紹 劉斌

一覽中、*印を附してある六人が南朝出身者である。比率として少ないように見えるが、北朝人のうち〃印より後の六人の傳は非常に短く、これを除くと北朝人も五人ということになり、各人のために割かれているスペースは互角と見ることが出来る。たとえ、これが「數合わせ」だとし

でも、それはそれで、「南と北とから同数を採用して、編纂者たちがその雙方に對して公平に見ている」という態度を示す必要があつたためであるかも知れない。

六人の經歷を見ると、隋に入るまでの經歷は二通りに整理することができる。すなわち、梁代生れの劉臻（梁武帝大通元年―隋開皇十八年、五二七―五九八）が梁↓北周↓隋、諸葛穎（梁武帝大同元年―隋大業八年、五三五―六一二）が梁↓北齊↓北周↓隋、とともに北朝の政權の下に入つた時期が早い。残る虞綽（陳文帝天嘉二年―隋大業十年、五六一―六一四）、王胄（陳武帝永定二年―隋大業九年、五五八―六一三）、庾自直（？―六一八）、潘徽（？―隋大業九年、？―六一三）の四人は、陳代生まれで、陳が攻略されて後、隋に入つた。そして隋に入つて後の事跡を見ると、いずれもが煬帝との關わりによつてそれぞれの人生が大きく左右され、煬帝宮廷の詩壇を賑わした文人たち、という側面が強いことは、否めない。

例えば、北地生活の長い諸葛穎の場合は、北周には出仕せず門を閉ざしていたところ、晉王廣すなわち後の煬帝に

引き立てられたことが記されている。

周武帝 齊を平らげ、調するを得ず、門を杜して出でざる者十餘年。周易、圖緯、倉、雅、莊、老を習い、頗る其の要を得、清辯にして俊才有り。晉王廣素より其の名を聞き、引きて參軍事と爲し、記室に轉ず。王太子と爲るに及び、藥藏監に除す。煬帝即位し、著作郎に遷る、甚だ親倖せらる。（周武帝平齊、不得調、杜門不出者十餘年。習周易、圖緯、倉、雅、莊、老、頗得其要。清辯有俊才、晉王廣素聞其名、引爲參軍事、轉記室。及王爲太子、除藥藏監。煬帝即位、遷著作郎、甚見親倖）

また、陳から隋に入つた場合も、早くから晉王廣の周邊で引き立てられた記録が見える。

陳亡び、關に入り、調するを得ず。晉王廣之を聞き、引きて學士と爲す。大業初、著作佐郎を授く。自直屬文を解し、五言詩に於て尤も善し。（陳亡、入關、不得調。

晉王廣聞之、引爲學士。大業初、授著作佐郎。自直解屬文、於五言詩尤善。

——庾自直

陳亡ぶに及び、晉王廣引きて學士と爲す。大業初、轉じて祕書學士と爲り、詔を奉じて祕書郎虞世南、著作佐郎庾自直等と長洲玉鏡等書十餘部を撰す。綽の筆削する所、帝未だ嘗て稱善せずんばあらず、而して官は竟に遷らず。（及陳亡、晉王廣引爲學士。大業初、轉爲祕書學士、奉詔與祕書郎虞世南、著作佐郎庾自直等撰長洲玉鏡等書十餘部。綽所筆削、帝未嘗不稱善、而官竟不遷。）

——虞綽

陳滅ぶに及び、晉王廣引きて學士と爲す。仁壽末、劉方の林邑を撃つに従い、功を以て帥都督を授く。大業初、著作佐郎と爲り、文詞を以て煬帝の重んずる所と爲る。

（及陳滅、晉王廣引爲學士。仁壽末、從劉方撃林邑、以功授帥都督。大業初、爲著作佐郎、以文詞爲煬帝所重）

——王胄

これは、「文學傳」所收の北朝系の人々の經歷と、ちょ

つとした對照を成す。すなわち、「文學傳」に收録される北朝系の人々は、大半が煬帝と縁遠い位置にいたことが知られるのである。例えば、王頰（西魏大統十七年—仁壽四年、五五一—六〇四）は、文帝時代には國子博士を授けられたりもしたが、間もなく職を解かれて漢王楊諒の下に配され、王の謀反を畫策した舉句に、敗死した人物であるし、北朝系の中でもしつかりした出自を持つ崔儼（仁壽中（六〇一—六〇四）、七十二歳で卒^⑩）は、隋に入ってから越國公楊素に請われて娘を公子に嫁がせるなど、もっぱら楊素の周邊で過ごした。諸王の身の上が不安定だった隋代には、諸王に仕える者たちも災禍に巻き込まれるものが多かったことで知られるが、王頰と同じく漢王に配された尹式もやはり敗死、一方、秦王の官屬となった常得志、そして齊王楊暉の下で長く仕えたが、機を見て辭職した孫萬壽、王貞は、壽命を全うしている。それぞれ地方官となった祖君彥、孔德紹、劉斌は、いずれも終わりを全うできずにいる。

辛うじて、中央に身を置いて、煬帝に近いところで活動したことが豫想されるのは、杜正玄、劉善經の二人だけで

ある。この二人こそは、「文學傳」の名から直ちに想定される收録要件を満たす事例、「文學傳」に入るべくして入った例と言えるかも知れない。というのも、本傳によれば、劉善經には『四聲指歸』一卷があり、また杜正玄に附傳される弟・杜正藏には『文章體式』があった。文學史上、韻律への関心が高まったとされるこの時期、その方面の著作に關わりを持つ両者が選ばれているのは、興味深い。

長くなったが、こうして見ると、ほとんどが煬帝に結びつく經歷を持つ南朝系の六人が、「文學傳」のスペース半分を占めるのには、それなりの意味がありそうである。煬帝は、自身で作った詩文も多數で、北朝風と南朝風の間をゆく、獨特の文風を示す一方で、その身邊に華美な文學・文化をせつせと近づけたことで知られるが、それを支えたとおぼしき人々がここにぞりと顔をそろえていることになる。

話を南朝系六人の上に絞ろう。この六人の作品で現存するものを、ジャンルで見ると、文は、王冑に「臥疾閩海簡

『隋書』文學傳の人びと（原田）

頤法師詩序」一篇、潘徽に「述思賦」（闕）「難魏澹敬字議」「韻纂序」（二篇とも本傳所收）三篇、虞綽に「大鳥銘」一篇（本傳所收）があるのみで、劉臻、諸葛頴、庾自直はゼロである（嚴可均『全上古三代秦漢三國六朝文』）。一方、詩では分量にばらつきがあるものの、相當な數が残っている（逯欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』）。詩以外の作品で逸したものがある可能性を考慮しても、「自直解屬文、於五言詩尤善」と本傳中で五言詩の才能を稱えられる庾自直をはじめ、概して「文學傳」所收南人たちは、文よりは詩において評價された人々であったのかも知れない。

（一）劉 臻

劉臻は、その生卒年（前掲）からもわかる通り、「文學傳」所收の他の南朝由來の人々より前の世代に屬する存在で、梁から北周を経て隋へ入ったその經歷を見ると、むしろ北周の代で亡くなった庾信（五一三―五八一年）や王褒（生卒年未詳）に近い。實際、庾信の集には、劉臻に和した「和劉儀同臻」「預麟趾殿校書和劉儀同」という詩二首

が見える。本傳の記述によると、隋に入つて後は、陳攻略に従つて、文翰を典つたとあるが、その人となりに関しては「臻」吏幹無く、又た性恍惚「疎放」という形容がなされている。後述の、「文學傳」所收の面々に共通する「品格不足」ぶりという線を勘案するならば、劉氏も本當の變わり者であつたのかも知れないが、或いは、隋に入つて後、身を守るための一種の韜晦であつた可能性も無くはないと思う。

現存する作品は、五言の「河邊枯樹詩」(『文苑英華』卷三二六「花木」一篇だけで、詳しい制作の時期や背景は不明である。冒頭句「奇樹臨芳渚、半死若龍門」に始まり、「疾風摧勁葉、沙岸毀盤根」と、嚴しい時世、環境に傷つき、死に體の枯樹の様子が歌われる。そして、もはや昔日の生氣を回復できない、老いの姿を嘆いて終わる(無復凌雲勢、空餘激浪痕。可嗟摧折盡、詎得上河源)。枯樹に人間の老いを重ね歌う、この詩の内容からすると、劉臻晚年、隋代の作品と見てよさそうである。

(二) 諸葛穎

六人の中で、現在まとまった分量の作品が見られるのは、諸葛穎、王冑の二人で、「文學傳」所收の他の文人に比べて隋代の作家として取り上げられることも多い。

諸葛穎は、單行の詩や文の他、その著作として「鸞駕北巡記三卷、幸江都道里記一卷、洛陽古今記一卷、馬名錄二卷」及び「集二十卷」が挙げられている。^⑬なお、唐代になると、『隋書』經籍志においては撰者未詳で著錄されている「玄門寶海一百二十卷」(子部雜家類)、「淮南王食經并目百六十五卷」(子部醫方類)の撰者として名を挙げられている(『新唐書』經籍志、『舊唐書』藝文志)。これは、本傳に「習周易、圖緯、倉、雅、莊、老、頗得其要」と記される博識ぶりとも合致し、隋からそう遠くない頃には、そうした博識を要するような著述を成し得る人物として受けとめられていたのだろう。

詩では、「奉和御製月夜觀星示百僚詩」「奉和方山靈巖寺應教詩」「奉和出穎至淮應令詩」「奉和通衢建燈應令詩」

「賦得微雨東來應令詩」「春江花月夜」と計六篇が存する。そのうち制作時期推定の根據を闕く「賦得微雨東來應令詩」を除く五篇すべて入隋後の作と推定される。

煬帝「春江花月夜」に和したとされる（『樂府詩集』卷四七）同題の五言四句は、率直で平明だと評される煬帝の作に呼應するように、諸葛穎の作も、一見して美的でわかりやすい。

張帆渡柳浦 帆を張りて柳浦を渡り

結纜隱梅洲 纜を結んで梅洲に隠る

月色含江樹 月色 江樹を含み

花影覆船樓 花影 船樓を覆う

「奉和御製月夜觀星示百僚詩」五言十四句は、題名からわかる通り、煬帝「月夜觀星詩」に奉和した作品である。他に、蕭琮、袁慶、虞世南に、それぞれ奉和の作品がある。いずれも、南朝出身の人々である。

竊窬神居遠 竊條として神居遠く

蕭條更漏深 蕭條として更漏深し

薄煙淨遙色 薄煙 遙色を淨め

『隋書』文學傳の人びと（原田）

高樹 肅清陰 高樹 清陰に肅む

星月滿茲夜 星月 茲の夜に滿ち

燦爛還相臨 燦爛として還た相臨む

連珠欲東上 連珠 東のかた上らんと欲し

團扇漸西沈 團扇 漸く西のかた沈む

澄水含斜漢 澄水 斜漢を含み

脩樹隱橫參 脩樹 橫參を隱す

時間送籌析 時に送籌の析を聞き

屢見繞枝禽 屢 繞枝の禽を見る

聖情記餘事 聖情 餘事を記し

振玉復鳴金 玉を振いて復た金を鳴らす

「更漏」「星月」「連珠」「團扇」「斜漢」「橫參」など、月夜の天空を連想させる縁語が多用されているが、これは煬帝の詩、他の奉和作にも見られることである。強いて言えば、「團圓」として素月淨く、脩條として夕景清し。谷泉暗石に驚き、松風 夜聲を動かす（團圓素月淨、脩條夕景清。谷泉驚暗石、松風動夜聲）という出だして始まる煬帝の詩が、もって回った典故も少なく、五人の作品のうちで一番

素直な言葉使いに見えるということだろうか。

他に「奉和方山靈巖寺應教詩」「奉和通衢建燈應令詩」

も、それぞれ煬帝「謁方山靈巖寺詩」「正月十五日于通衢建燈夜升南樓詩」に奉和したものと見られ、ともに『廣弘明集』卷三〇に收録される。また、「奉和出類至淮應令詩」には、南朝出身の虞世南、北朝系の蔡允恭、孔執恭に同題の詩がある。

涉穎倦紆迴 穎を涉り紆迴なるに倦み

浮淮欣迺直 淮に浮び迺直なるを欣ぶ

遙村含水氣 遙村 水氣を含み

遠浦澄天色 遠浦 天色に澄む

靈濤稍欲近 靈濤 稍近からんと欲し

仙巖行可識 仙巖 行可 識る可し

玄覽屬睿辭 玄覽 睿辭を屬る

風雲有餘力 風雲に餘力有り

頽水、淮水の豊かな流れと河岸の風景のイメージを詠み、「玄覽屬睿辭 風雲有餘力」と、煬帝への賛辭で結ぶ。賛辭を挟むのは、奉和・應令詩の決まりのようなものだが、

他の三人にも「欲知仁化治、謳歌滿路歸」（蔡）、「睿情欣逸賞、臨泛入淮淝」（孔）といった句が見える。

今日存する詩がすべて「奉和」の詩であるというだけで、何ごとかを斷言するわけにはいかないものの、諸葛穎自らの動機にもとづく作品というものが一つも傳わらないのは、煬帝から寵愛され、私生活空間へも出入りが許された（甚見親倖、出入臥内）と記されている本傳中の諸葛穎の像と、妙に符合している。今や、眞相は知り得ない。しかし、諸葛穎を煬帝の宮廷を舞臺として生きるタイプの文人、煬帝の意を迎えた詩作をする文人として捉える見方は、だいぶ早くから出來上がっていたのだろうか。

諸葛穎はまた、後にも觸れる通り、「文學傳」所載の他の南朝人、王胄や虞綽とも摩擦を起こしたし、「文學傳」外の南朝系文人柳惔といがみ合った（穎性褊急、與柳惔每相忿鬪、帝屢責怒之、而猶不止。於後帝亦薄之、ことが記されるなど、言わば隋代宮廷文學關係者のトラブルメーカーとでもいふべき像でもって描かれている。そういう人物が、政權の責任者としての煬帝にとって、まともな價值のある

「臣」だったのか大いに疑問である。ことによると、文學制作の方面、學問的場面において、南朝の文風を體現する文人として隋宮廷に不可闕の存在だったからこそ、そうした瑕疵も見逃されたのかも知れない。本傳には、煬帝がかつて諸葛穎に賜った詩として、一篇が收録されている。

「長洲苑に參翰し、肅成門に侍講す。名理 研覈を窮め、英華 討論を はしこ恣にす。實錄は平允に資き、傳芳は後昆を導く」と述べられるその内容は、本質的な分析など無用の、手放しで賞賛するものとなっている。判斷の是非は別として、南朝由來の才に對して示される、煬帝のこのような大盤振舞いな贊辭や憧憬は、隋代に於ける南北間の埋められぬ格差、融合しきれない溫度差を象徴しているとも受け取ることができる。

(三) 王 冑

諸葛穎と並んで現存文獻が豊富なのは、王冑である。本傳には「所著詞賦、多行於世」と記されているが、現在単行の詩文十七篇二〇首が傳わり、隋代の詩人全體の中で

『隋書』文學傳の人物と(原田)

も、煬帝や薛道衡、盧思道など一部の多作な例を除けば、

その数は少ないほうではない。現存の十七篇において、王冑の詩には一つポイントがある。すなわち、「言反江陽寓目瀟溪贈易州陸司馬詩」(「文苑英華」では卷二四八「寄贈二」以下、この項「文苑英華」での分類を示す)、「酬陸常侍詩」

(卷二四〇「酬和二」)、「答賀屬詩」(同前)、「別周記室詩」

(卷二六六「送行二」)、「賦得鴈送別周員外戌嶺表詩」(卷二八五「送行二十」)など、煬帝をはじめとする王侯貴顯以外の、少なくとも同僚・知己とおぼしき人物を相手として詠じた作品や、「臥疾閩越述淨名意詩并序」のように、自身に即して作ったと見られる作品が含まれていて、目をひくのである。詩題に提示されている相手は、易州陸司馬、陸常侍、賀屬、周記室、周員外と五件あるが、残念ながら特定できないものばかりである。^⑤

試みに「言反江陽寓目瀟溪贈易州陸司馬詩」を見てみよう。五言四十句。

遊人賣藥罷 遊人 藥を賣るを罷め

徐步反江干 徐ろに歩みて江干に反る かえ

行吟瀟陵岸 行吟す 瀟陵の岸

迴首望長安 首を迴らして長安を望む

行旅を主題とする詩文によく見られる、焦點をしぼってゆく形式で始まる。次いで、「晨華照城闕、參差復鬱盤。千門含日麗、萬雉映霞丹。……」と、都譽めの詩賦で定着した句が續く。城市の光景に目を遊ばせる旅人（遊人）の視線を詠じたものか。

信美非吾樂 信に美なるも吾が樂しみに非ず

何事久盤桓 何ぞ久しく盤桓するを事とせん

欲動南登詠 南登の詠を動さんと欲し

還謠北上難 還た北上の難を謠う

眷言思舊友 眷て言に舊友を思い

徂遠路漫漫 遠路の漫漫たるを徂く

「舊友」は、『文苑英華』では「故友」。この後にも「十年風月に阻てられ、萬里金蘭と別る。心期竟に何許、懷抱日摧殘す。容華冉冉として謝り、衣帶朝朝寬む。……（十年阻風月、萬里別金蘭。心期竟何許、懷抱日摧殘。容華冉冉謝、衣帶朝朝寬。……）」と、古詩以來の、遠くに在る親しい者を

思いやる字句、表現が續いている。

「酬陸常侍詩」は五言三十句。陸常侍については特定できないながらも、冒頭四句から、かれこれ四十年を數えようかというほど古くからの知り合いで、しかし、當時陸氏は江南「五湖曲」に在つて、長らく會えずにいる間柄とわかる。内容は事實にもとづいていてと考えてよいのではないか。五句目は、『論語』子罕の「歲寒、然後知松柏之後凋也」を下敷きにして、陸氏を嚴しい環境にも衰えを見せぬ松柏に喩え、ひきかえ自分は死に體だ、と對比して見せている。誇張を含んでいるのかも知れないにせよ、王粲壯年以降の作であることは間違いない。¹⁶⁾

相知四十年 相知 四十年

別離萬餘里 別離 萬餘里

君留五湖曲 君は五湖の曲に留まり

余去三河涘 余は三河の涘を去る

寒松君後凋 寒松 君は凋むに後れ

溺灰余僅死 溺灰 余は僅かに死すのみ

何言西北雲 何ぞ西北の雲と言わん

復觀東南美 復た東南の美を觀る

… (中略)

霑襟行自念 襟を濡らして行^{ゆく}自ら念う

哀哉亦已矣 哀しい哉 亦た已ぬる矣

吾歸在漆園 吾が歸は漆園に在り

著書試詞理 書を著して詞理を試みん

勞息乃殊致 勞息 乃ち致を殊にし

存亡寧異軌 存亡 寧んぞ軌を異にせん

大路不能遵 大路 遵う能わず

咄哉情可鄙 咄なる哉 情は鄙しむべし

哀切な言葉が散りばめられているが、遠くに別れ別れになつた友や家族を思う五言詩にありがちな、常套的な流れに即して語られている。「別れ別れで、久しく對面できずにいる私たち」↓「優秀なあなた、非才な私」↓「昔のことが懐かしく思われるこのごろ」↓「死の豫感」↓「生への悲觀」↓「隱遁への憧れ、決意」。陸常侍との間で共有したい感情は何なのだろうか、陸氏に伝えたい感情は何なのだろうか。そういつた王冑自身の個人的な表白よりは、老いを目前に

して舊知に贈る嘆きの歌の持つべきイメージを優先した作品となっている。

他の「別周記室詩」「答賀屬詩」なども、どうやら同じ南朝由來の人々を相手とすると推測される内容ながら、隋の統一を挟んで、多難を乗り越えてきた自分、或いは相手への時間を思いやる感慨の表現は、なぜか通り一遍である。因みに、詩題から、まさに王冑がわが身に即して詠じたことが豫想される「臥疾閩越述淨名意詩并序」も、冒頭の二句「客行萬餘里、渺然滄海上」は、捉えようによつては「陳から隋へ、動亂の續いた時代を生きてきた自分」の身の上を見立てたものとも言えるが、全體には信心を語る内容が主體で、「信矣大醫王、茲力誠難量」という結びで終わっている。深く自らの軌跡に立ち入るといふものではない。^⑦これは王冑ばかりでなく「文學傳」所收の南朝系文人六人の作品に共通していることだが、自己の内面を洞察したり、自分の人生を振りかえつてみたり、という姿勢があまり見當たらない。技巧に任せてイメージ作りを尊ぶ傾向がある。とまで言つては言いすぎだろうか。

煬帝やその宮廷に關わると推定される作品は、「白馬篇」五言三十四句、「紀遼東二首」七言八句、「奉和悲秋應令詩」それに本傳に引用される「奉和賜酺詩」がある。それぞれ、煬帝に「白馬篇」、「紀遼東二首」、「悲秋詩」があるのによつて判斷できる。

『隋書』本傳にも見える「奉和賜酺詩」は、皇帝からの賜物についての奉和詩で、正史に收められるだけあつて、五言二十句のうちに、隋朝または煬帝に對する贊辭がふんだんに盛り込まれている。

河洛稱朝市 河洛 朝市を稱し

崱函實奧區 崱函 實に奧區たり

周營曲阜作 周は曲阜の作を營み

漢建奉春謨 漢は奉春の謨を建つ

大君苞二代 大君 二代を苞^かね

皇居盛兩都 皇居 兩都に盛んなり

「河洛」、「崱函」と中原を象徵する地理をたどり、「周」「漢」に擬え、「大君苞二代 皇居盛兩都」と褒め上げる冒頭以下、都譽めに關する字句が並ぶ。最後は、次の通り

天子の恵み深さと慈しみを讃える結びとなっている。

詔問百年老 詔して百年の老を問ひ

恩隆五日酺 恩は五日の酺より隆^{さかん}なり

小人荷鎔鑄 小人 鎔鑄^{こうむ}を荷り

何由答大鑪 何に由りてか大鑪に答えん

なお、「奉和悲秋應令詩」を、煬帝「悲秋詩」と比較してみると、冒頭の四句を見比べるだけでも、兩者においてだいぶ技巧の度合いが違ふのがわかる。煬帝「悲秋詩」が「故年 秋始めて去り、今年秋復た來たる。露濃やかに山氣冷ややかなり、風急に蟬聲哀し（故年秋始去、今年秋復來。露濃山氣冷、風急蟬聲哀）」と、平明な詠みぶりになっているのに對して、王冑の和した詩は「秋天 文學に擬し、秋水 莊蒙を擅にす。草は蒹葭の露に濕り、波は洞庭の風に卷かる（秋天擬文學、秋水擅莊蒙。草濕蒹葭露、波卷洞庭風）」と句ごとの典故が目立つ。和するほうが技巧を凝らすのも、この種類の詩の慣例に屬するのだろう。

(四) 虞綽、潘徽、庾自直

この三人は、現在に傳わる作品が各一篇程度と乏しいこともあり、ここに簡単に紹介するにとどめたい。既に見た三人同様、隋代の文人を取り巻く不穩な時代狀況が讀み取れる。

虞綽の場合、本傳に、諸葛穎との間が險惡で、諸葛穎に「粗人」と極めつけられるなど、問題を抱えていたことが詳細に記されている。^⑬最終的に、楊玄感との交遊の心證を疑われ、煬帝の不興を買って、邊地へ逃避行の末、非業の死を遂げた。現存する詩は、そうやって最期に囚われの身となつて詠じた「於婺州被囚詩」(『初學記』卷二十「囚」)一篇のみである。

本傳に「性恭慎にして、妄りに交遊せず、特だ帝の愛でる所と爲る(性恭慎、不妄交遊、特爲帝所愛)」と記される庾自直は、潘徽とともに、出仕方面では危なげない人物であつたようだが、それでも、最後には宇文化及の亂のあとで、不幸な死に方をする。現存する詩は、應詔の「初

發東都應詔詩」五言十二句一篇である。

潘徽は、入隋後に仕えた秦王楊俊の下で『韻纂』や『萬字文』を撰したり、煬帝の招聘に遭つて後も、『江都集禮』や『魏書』(未完)の編纂に携わつたり、とどちらかと言えば學術の方面での事跡が目立つ。現存作品は、陳代のもので、『全陳詩』に收録されている。隋代の作品については本傳にも記録が無い。他の五人が、煬帝の周圍で齟齬とした事跡を残すのに比べ、潘徽だけは、煬帝との關わり方に多少餘裕があるように見える。そんな彼さえも、楊玄感との舊交が崇つて身を滅ぼしている。

些か亂暴なまともになるが、この人々による現存作品の多くに共通しているのは、作者自身の心の在り處が見えない、ということである。かつて、魏晉以降の南朝人、謝靈運や沈約などは、かなりの政治的修羅場にいようと、そこにいながら、他に心を寄せ、心を遊ばせる世界があり、そのもう一つの世界を託した詩文が、しばしば見られた。^⑭「身を官場に置きながら、意識だけは山巖の世界に遊ぶ」

の精神という言い方もされている。残念ながら、『隋書』文學傳の南方人たちの作品には、そういうものが見出されない。各作品は、言葉の精緻さ、形式の整いぶりは、南方の流れを享けているようだが、詩を取り巻く現實しか見えない。

四 士大夫の生き方として

前章で見てきた通り、南朝系六人の傳には、彼らの文學史上における事迹に言及する筆の端々に、彼らの日常、處世態度についての否定的、批判的記述が交えられている。

このことは、「序」に「或學優而不切、或才高而無貴仕、其位可得而卑、其名不可堙沒」と述べて、瑕疵はあるけれど、むざむざ埋もれさせるのは惜しいから、と、彼らのために「文學傳」を立て、そこに一連の人物を採録することについて斷り書きされていた「文學傳」の趣旨と符合する。特に、諸葛穎、虞綽、王冑の三名の傳では、三人の間で、或いは時には同じ南朝出身の虞世基なども巻き込んで、煬帝の關心を自分のほうへ引こうと熾烈で見苦しい争いが續

いていたらしいことが、細かに記されている。それは、どんなに彼らが「學優」「才高」でも「不切」で「無貴仕」で「其位可得而卑」という評價に當たるか、そう評されても仕方ないか、を強調する力を持つようである。今日の目で見ると、彼らの人品・資質が劣っていたのか、それとも、近侍する不安定な文人たちにそのような争いを誘うような状態を許した煬帝に非があったのか、事情は、計り知れない。とは言え、そうした彼らの日常と、その文學的成就・評價とは、必ずしも直接に結びつくものではないはずだ。

そう言えば、第二章で見たように、「文學傳」所收の北朝系の人々も、終わりを全うできたのは極く少数であった。「文學傳」以外の『隋書』諸傳を検すれば、個別に傳を立てられた人々として、決して安穩に生きられた時代ではないことは明白だから、人生を全うできなかったことが、「文學傳」收録の決定要因などとは考えられない。何が分かれ目のだろう。「序」にも擧げられている「才」、持って生れた「才」の問題だろうか。ひょっとすると彼らは、同

時代を生き、しかも後世から高く評價されている顔之推や虞世基、はたまた北朝系の盧思道たちのような「才」に恵まれなかったのも知れない。しかし、そうした人々と、

「文學傳」の人々との間に本質的にどれほどの差異があったのかを今から確認するのは至難の業である。時代の近い『隋書』編纂者においても、それは難しかったろう。そもそも「序」には「才は高くして而も貴仕無し」と言っているほどである。「才」は十分だったかも知れないのだ。

一つ考えられるのは、所與の「才」を補って餘りある、士大夫としてあるべき處世を全うしたか、或いは、たとえ「才」があつたとしても、それを自ら損なつてしまいかねない、瑕疵のある處世態度で生きたかの違い。『隋書』編纂者は、當人たちの死後に傳わつた情報によつて、そんな見極めをすることは可能だったであろう。亂暴なようだが、「文學傳」所收南朝系の文人たちの事跡を追つてみると、彼らをこの傳に収めた編纂者の網の目は、この違いを飾いつけているような氣配がある。無論このことは、他の正史「文學傳」「文苑傳」の收録情況をつぶさに檢證するなど、

『隋書』文學傳のひと（原田）

さらなる確認を要する。單なる假説に過ぎない。今後の課題としたい。

小 結

以上、まだまだ説明を要する課題を残すものの、ここでも本論のまとめを試みたい。

本論で見てきた「文學傳」所收南朝系六人の傳と作品からは、これより一昔前の庾信や王褒たち、北朝に移された南朝人たちに見えたような、南朝時代を哀惜して歌う姿勢が窺われない。むしろ、過去を振りかえろうとはせずに、

「今」に従っている。複雑で危険な隋代の事件に巻き込まれたり、利己的な力争いをしたり、「佞臣」めいた形で煬帝周邊に近侍したり、と現實に體當りの行跡。それは、隋という流動的な時代についていくために必須だったのではないか。そして、そのような處世から生れるのは、目の前の現實や現實に付き合う相手に合わせた奉和詩、酬唱詩ではなかったか。それらの詩に新たな何か、が見出せないのは、彼らの「才」の限界であつたかも知れない。後世の私たち

は、それを残念がつて、彼らの不徳のように思う。しかし、絶えず發展や進化を求め、そこにのみ價値を見ようとするのは、現代の私たちの悪い癖ではないか。新しい時代と古い時代、南と北、両者が混在する時代、北方寄りの制度に身を置きながら、とうとう自身に備わる南方的なものを抱え續けた跡の窺える「文學傳」所收南朝系六人の傳と作品は、「新しい制度は始まったが、人物のほうはまだ舊態依然たるものがあつた」(前掲)この隋という時代の特徴と符合する。

そんな彼らの傳を收録した「文學傳」は、隋代文學の一つの相を反映するという點で、やはり『隋書』に不可缺の一部なのではなからうか。

註

① 「文學史が後世の立場から見て意味のある文學を記述するか、それともそれぞれの時代において文學がどのような様相を示していたかを記述するかという態度の相違」について、川合康三編『中國の文學史觀』(二〇〇二年、創文社)「今、なぜ文學史か」参照。

② 南北朝期から隋に至る南北文風の交流の變遷について論じた先行文獻としては、曹道衡・沈玉成編著『南北朝文學史』(一九九一年、人民文學出版社 第二十七章「南北朝文風の融合」)がある。また、同書第二十六章「隋代文學」には、「孫萬壽和由北齊入隋的文人」「隋代的南方文人」の項目が立てられ、南朝由來・北朝由來の隋代文人について、それぞれの經歷に即しての検討が試みられている。

③ 南北雙方の制度も文學もなかなかスムーズに融合しなかったことに關して簡潔な論考は、宮崎市定『九品官人法の研究』第三編・四「南朝と北朝」がある。

④ 隋を、どちらに結びつけるかについては、嚴密には歴史學方面の見解への配慮も影響するとしても、文學關係では、例えば、羅宗強氏が『魏晉南北朝文學思想史』(一九九六年、中華書局)『隋唐五代文學思想史』(一九九九年、中華書局)という括り方をしている。管雄『論北朝文學』(『魏晉南北朝文學史論』一九九八年、南京大學出版社)では南北朝を北周までで限っているが、曹道衡・沈玉成『南北朝文學史』(前掲注②書)では、隋代文學までを含むなど、研究者によつて、扱い方が異なる。

⑤ 唐・劉知幾『史通』序例編に、史書の諸篇に冠せられた「序」が、編者がその篇を立てた意圖を明確にする役割を持つことと、「序」を置くのが慣例化することに伴う利弊が述べられているのも、この流れと關係あるか。

⑥ 古川末喜『初唐の文學思想と韻律論』（二〇〇三年、知泉書館）第Ⅱ編「初唐の國家と文學思想」。

⑦ 暨永明、天監之際、太和、天保之間、洛陽、江左、文雅尤盛。于時作者、濟陽江淹、吳郡沈約、樂安任昉、濟陰溫子昇、河間邢子才、鉅鹿魏伯起等、並學窮書圃、思極人文、綢繆鬱於雲霞、逸響振於金石。

⑧ 梁自大同之後、雅道淪缺、漸乖典則、爭馳新巧。簡文、湘東、啓其淫放、徐陵、庾信、分路揚鑣。其意淺而繁、其文匿而彩、詞尚輕險、情多哀思。格以延陵之聽、蓋亦亡國之音乎。周氏吞併梁荆、此風扇於關右、狂簡斐然成俗、流宕忘反、無所取裁。高祖初統萬機、每念彫彫爲樸、發號施令、咸去浮華。然時俗詞藻、猶多淫麗、故憲臺執法、屢飛霜簡。煬帝初習藝文、有非輕側之論、暨乎卽位、一變其風。

⑨ 例えば、『梁書』の場合、沈約、江淹、任昉は「文學傳」以外に立傳されており、『南齊書』でも、王融、謝朓は「文學傳」外である。今日の文學史に於いて、これら文人が取り上げられる頻度が、それぞれの「文學傳」所收文人をはるかに上回るものであることは、周知の通り。

⑩ 曹道衡・劉躍進『南北朝文學編年史』（二〇〇〇年、人民文學出版社）では、仁壽三年（六〇三年）卒と推定している。

⑪ 前掲注⑥書。

⑫ 日本國內の論考では、宮崎市定『隋の煬帝』、道坂昭廣『隋の煬帝』（一九八六年、『中國文學報』第三十七冊）等參

【隋書】文學傳の人びと（原田）

照。

⑬ 『隋書』經籍志に著録される諸葛穎の著作は、「北伐記七卷」「巡撫揚州記七卷」（ともに史部地理類）、「著作郎諸葛穎集十四卷」（集部別集類）の三件で、「北伐記七卷」「巡撫揚州記七卷」はそれぞれ「文學傳」の「饒駕北巡記」「幸江都道里記」に當るか。興膳宏・川合康三『隋書經籍志詳攷』（一九九五年、汲古書院）參照。

⑭ 煬帝「春江花月夜二首」は、「暮江平不動、春花滿正開。流波將月去、潮水帶星來（其一）」「夜露含花氣、春潭瀟月暉。漢水逢遊女、湘川值兩妃」（其二）。

⑮ このうち「周記室」については、同じ「文學傳」所收の孫萬壽「和周記室游舊京詩」の「周記室」と同一人物の可能性もある。曹道衡・沈玉成『中古文學史料叢考』（二〇〇三年、中華書局）七五三頁參照。

⑯ 前掲注⑮書では、煬帝卽位後に黜免されたことから、このような發言をしたのではないかと案じている（七六七頁）。

⑰ 序文も、「余疾に閩海に臥し、彌しく留まること旬朔たり。善友顯法師、我に勸むるに淨名妙典もて身心を調伏せんことを以てす（余臥疾閩海、彌留旬朔、善友顯法師、勸我以淨名妙典調伏身心。）」と、簡単な経緯を記すだけである。

⑱ 「綽恃才任氣、無所降下。著作郎諸葛穎以學業倖於帝、綽每輕侮之、由是有隙。帝嘗問綽於穎、穎曰、虞綽粗人也。帝頷之」。

中國文學報 第六十八冊

⑬ 森三樹三郎『六朝士大夫の精神』（一九八六年、同朋舎）

二四〇頁參照。